



スクールカウンセラーだより

こんなちは。みなさんには、だれかに言われてうれしかった
言葉や、いやな思いをした言葉はありますか。言葉は、毎日使
っている身近なもので、そんなに考えずに、なげなく言って
しまうことが多いと思います。今回は、「言葉の力」について
いっしょに考えてみたいと思います。

『One-piece』でルフィがいつも言っているのはどんな言葉?
『呪術廻戦』で七海さんが最後に言った言葉は?

言葉の力とはどんなこと?とふしきに思った人もいる
かもしれません。それは、「ある言葉を言われた人が、そ
の言葉についてどう思い、どう行動するか」ということ
です。

たとえば、ルフィは「海賊王におれはなる!」と、
何回も言います。いろいろな敵と戦いながら、くじけそ
うになった時にも、「海賊王になる!」と言うことで、
自分に勇気をあたえ、自分がどうなりたいのかを確認し
なおします。

また、言葉は何度も言うことで、言葉の力が強くなっ
ていきます。「海賊王におれはなる!」と何度もくり返
すうちに、ルフィにとって本当に実現できることにどん
どん近くなっている、「自分にはできる!」という
『自信』のような気持ちになっていったのではないかと
思います。



呪術廻戦で、呪術師・七海さんは、虎杖くん
に「後はたのみます」という言葉をのこします。
そしてこの言葉は、虎杖くんのこころの中に
ずっと残り、その後の戦いの中で苦しい思い
をしながらも、七海さんにたくされた「後はた
のみます」という言葉を思い出して、また立ち
あがり戦うという『希望』をこころにもつこ
とができます。

このように、言葉には力があります。良い
ことでも悪いことでも、わたしたちは、だれか
に言われたなげない言葉を、こころにもって
生きています。また、だれかからの言葉だけで
なく、自分への言葉にも、決心を示したり、
「やるぞ!」という気持ちを強くしたりする
力があります。もちろん、だれかを傷つけて
しまう力も言葉にはあります。
もう一度、言葉の使い方について考えてみ
てもよいかもしれません。



【保護者の皆さん】

こんにちは。今回は、言葉とそれが相手に及ぼす影響について考えてみたいと思います。

～『呪術廻戦』にみる言葉の重み～

保護者の皆さんには『呪術廻戦』という作品をご存じでしょうか。ネクスト鬼滅として話題になり、現在もその勢いを拡大し続けている作品です。この作品が多くの人々の心に響いているのは、多種多様な少年漫画の面白さがぎゅっと詰まっていることに加え、さまざまなかたちで描かれる「言葉」のもつ力や重みが影響していると言われています。

言葉の力や重みと聞くと「言霊」という言葉が浮かびますが、これは「万葉集」にも記述されるほど、古くからその効果と力が人々に信じられてきたものです。

『呪術廻戦』では、言葉で相手を呪い、攻撃する力をもった呪術師が登場します。呪術師が「潰れろ」ということで敵が実際に物理的に潰れるなど、「言霊」を体現した力をもっています。強い言葉を使えば使うほど、その言葉を放った呪術師自身にもその効果が跳ね返ってくるなど、言葉のもつ「重み」が表現され、描かれています。また、戦いにおいても、自らのもつ能力を相手に説明する「術式開示」によって力を増幅させるという設定が組み込まれています。

私たちは、言葉によって多様なコミュニケーションをして、様々な言葉に触れ、その影響を受けながら生きています。『呪術廻戦』の主人公である虎杖悠二（いたどりゆうじ）の祖父は、彼に「オマエは強いから人を助けろ」「オマエは大勢に囮まれて死ね」と言って病でこの世を去ります。祖父が残したこの言葉は、その後の彼の信念・行動理念となり、敵と戦うための言動力として彼を支え続けることになります。祖父の「孤独に死にゆく自分のようにになってほしくない」という思いを背負い、多くの人を助けるために生きていこうとするのです。

そして、先輩の呪術師である七海健人が、虎杖悠仁の目の前で敵にやられてしまうとき、「後は頼みます」という言葉を遺します。これらの言葉はだれかに「希望や思いを託す」ということで、同時にその人のこころを縛り付けるという言葉の両面性を表していると思われます。

このような言葉の両面性は現実においても様々な場面で見られるようです。家庭で、学校で、大人から子どもへ、友だちから友だちへ…「こうあってほしい」と相手に期待し希望を託すという一見前向きに思われる行為が、「この気持ちにあなたは応えてね」というメッセージとなり、相手に重さを背負わせることもあるようです。このような言葉を巡る複雑な体験に心当たりのある保護者の方もいらっしゃるかもしれません。

～人生ドラマの禁止令とは！？～

アメリカの精神分析医エリック・バーンが創案した「交流分析」という心理的な理論体系があります。わたしたちの人生を一つのドラマのようなものとしてとらえ、その中で自分が演じている役割を「脚本」と呼んでいます。その「脚本」は、いくつかの観点から大きく ①破壊的な脚本 ②平凡な脚本 ③成功者の脚本の3つに分けられます。この3つの「脚本」のうち、平凡な脚本や破壊的な脚本には「禁止令」というものが大きく影響していると考えられています。「禁止令」とは、「親が子どもに与える指示や命令のうち、不公平で、否定的意味をもつもの」と定義されています。

「禁止令」とは具体的にどういった言葉なのでしょうか。例えば、子どもが困って泣いていたような場合に「泣くのはお母さん嫌いよ！」と言われる。あるいは、ケガをして帰ってきた時に「痛くなんかないよね！」と言われる。そのような言葉がけが繰り返されると『自然な感情を表してはいけない』という隠れたメッセージが子どもに伝わってしまうとされています。また、子ども時代に親が先回りして何でもやってしまったり、自分がやったことに「何をやってもダメね」「いつもヘマばかりするのね」というように評価される体験が繰り返されたりした子どもは、『成功してはいけない』という「禁止令」を受け取るそうです。その結果として、人生において大きな失敗を何度もくり返したり、物事が途中で非建設的な形で終わってしまったりという「脚本」を描くようになっていくかもしれない…と言われています。

このように何気なく発した言葉が、知らず知らずのうちに大きな影響を与えることがあるようです。よろしければ、お子さんとの会話のヒントにしてみてください。

参考文献：サブカルチャーのこころ おたくなカウンセラーがはじめて語ってみた
笛倉尚子・新井久美子共著 木立の文庫
分かりやすい交流分析1／脚本分析5 株式会社チーム医療

